

ヒッポクラテス文書集成『医術について』本文校訂ノート (1)<sup>(1)</sup>*de arte* 4.1—Jouanna<sup>(2)</sup>

安西眞

まず、この文書の中世伝承(関連するパピルスはない)についての現在のところ到達点と判断されている見解を簡単に説明しておくべきであろう。この文書の全体を伝える中世写本は20本<sup>(3)</sup>。そのうちM (Venetus Marcianus gr.269)の系統に属する本が19本。全くこの系統に属さないA (Parisinus gr. 2253)という本が別にある。M系が、直接Mに依存している(残りの18は、世代の距離こそ違いますが、直系)のか(Jouanna<sup>(4)</sup>)。あるいは、MもM系というひとつの流れの、一番古いにしてもひとつの支流にすぎないのか(Gomperz<sup>(5)</sup>)。この問題については、筆者はいまのところ最終的な判断を保留している。事情があつてMが未入手で、さまざまな校訂版がMの読みについて報告するところと、実見可能な状態にあるI (Par. gr. 2140)、H<sup>b</sup>などというMと世代的に近い本を照らし合わせている段階にあるからだ。ただ、どうやらJouannaが想定する伝承形態が極めて実体に近いのではないかと考え始めている。

Jouannaは、従つて、本文再構築の基礎となるべき中世伝承の祖本を構成する段階で、M(10世紀書写)とA(11世紀書写)にもつぱら頼り、IH<sup>b</sup>は書写者Mの手が確定できない場合に限って報告している。筆者がこの原則に変更を加える必要があると判断する箇所は*de arte*に関する限り見つかつていない。以上が、

(1) 本稿の査読をして下さったおひとりにここでお礼を申し上げておきたい。その査読者は一応掲載を可とするが、自分にはJouannaの印刷したフランス派ヒッポクラテス校訂の伝統とも言える本文(注6参照)が一応読めるようにも思える、と明快な意見を含む但し書きを付けた論評を寄せられた。筆者はかなり深刻にその論評を受け取り、いったん、本号でのこのノートの掲載を見送るべきではないか、という選択肢まで考えた。しかし、筆者の感じているフランスで伝統的に採用されてきた本文への疑問を今少し明確にした上で、現在一応これが最善であると考え案を提示するのもけして無意味ではないだろうと考え、本号への掲載を決断した。このことをここでお断りしておきたい。

(2) J. Jouanna, *Hippocrate, Œuvres Complètes*, vol. V, Collection des Universités de France, Paris, 1988 (以下Jouannaという形で指示する)

(3) その詳細についてはJouanna 193に見ることができる。

(4) J. Jouanna, 192-211

(5) Th.Gomperz, *Die Apologie der Heilkunst*<sup>2</sup>, Leipzig, 1910, 60-69

*de arte* の中世伝承についてのおおよその見取り図である。

次に、*de arte* の標準テキストとして現在認められている Jouanna の該当箇所の本文と、関連する写本情報その他を提示する。

καί φασιν οἱ τὰ χεῖρω λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων  
τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχη ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην.

(Jouanna 訳：「そして医術を、病いに擱まるひとびと(の存在すること)を根拠に、より悪く言うひとびとは、それ(病い)を逃れるひとびとは、めぐりあわせでそうしているのであって、(医という)技術をつうじてそうしているのではない、と主張するのである」)

post νοσημάτων hab. καὶ M // τύχη A<sup>4</sup>M τύχει ? A

少なくとも 19 世紀以降は、ヒッポクラテス研究で大きな役割を演じてきたフランスの校訂者たち<sup>(6)</sup>はこの本文を印字してきたし、また訳を付ける場合はおおむねこのような訳を付けてきた。

筆者が上の本文について感じている疑問は 2 つある。ひとつは前置詞 *διὰ* (引用本文一行目に見られる方のそれ)の使われ方であり、もうひとつは、ap.cr. に記された *καί* の処置をめぐる対応である。

後者の方から考えてみよう。Jouanna の想定する伝承形態が正しいとすると、A と M は、この作品の中世伝承中の祖本から出る 2 本の線を意味していることになる。言うまでもなく、理論的には、variant が生じた場合、A が正しい、M が正しい、どちらも正しくない、この 3 つの可能性は同等の確率的価値をもって生じるはずである。具体的にくだんの *καί* の場合は、どちらも正しくない、はあり得ないので、M が正しく伝えているか、祖本にないものを書き加えてしまった、かは、あくまでも理論的には半々の可能性で認めなければならない。

さらに付け加えると、A と M は古い写本で我々はこの文書に関してはかなり古い形にまで、文字の跡を追ってたどりつけるという幸運に与れているのだが、どちらも非常に写し落としの多い本なのである。時間のあるひとはこの *de arte*

(6) E.Littre, *Œuvres complètes d'Hippocrate*, vol.6, Paris, 1849. この全集版は、今でも重要な校訂テキストであり、現在進行中の Jouanna たちのこれにかわる全集版出版の試みがまだ、比較的人気のある作品に限られている現状では、多くの作品に関する標準テキストたる評価を失っていない。

の10章の近辺を、校訂注をたんねんに見ながら、AとMが実際はどんな本なのか考えてほしい。どちらの本も、それぞれ単独で読むならば、おおげさに言えばギリシア語で書かれた敬意に値する文書だとは思えないような抜け落ち方を見せていることが分るだろう。ところが、AとMを重ね合わせてそれぞれ補っていくと、そこにはかなり緻密なギリシア語の文が見えてくる。こういう不思議な経験が出来る。

要するにここでの結論として、*καί*がMに見えることを、これまでのフランス派の校訂者たちの一致した態度ではなく(つまり不注意な付け加えとみなす)、正しい伝承である、と考える根拠は、少なくとも、私の理解する写本伝承の原理に関わることがからすればじゅうぶんにあると思える<sup>7)</sup>。

この時点で前置詞 *διά* の問題を考えることを始めよう。さまざまに読み取る位置を変えて読んでみるのであるが、どうしてもこの前置詞に対する違和感は払拭出来ない。以下は、結局それを除去する試みとも言える。

この作品ではかなり前置詞 *διά* + 対格の形が使われている。すべて列挙してみよう：

ὁ δὲ παρεὼν λόγος τοῖσιν ἐς ἱητρικὴν οὕτως ἐμπορευομένοισι ἐναντιώσεται, θρασυνόμενος μὲν διὰ τούτους οὐς ψέγει, εὐπορέων δὲ διὰ τὴν τέχνην ἢ βοηθεῖ, δυνάμενος δὲ διὰ σοφίην ἢ πεπαιδευται. (I.3)

οἶμαι δ' ἔγωγε καὶ τὰ ὀνόματα αὐτὰς διὰ τὰ εἶδεα λαβεῖν. (II.3)

Εἰσὶ δὲ τινες οἳ καὶ διὰ τοὺς μὴ ἐθέλοντας ἐγχειρέειν τοῖσι κεκρατημένοισιν ὑπὸ τῶν νοσημάτων μέμφονται τὴν ἱητρικὴν (VIII.1)

ν δ' ἐν ᾧ τούτο ὀράται, κρατηθῆ διὰ τὸ βραδέως αὐτὸν ἐπὶ τὸν θεραπεύσοντα ἐλθεῖν ἢ διὰ τὸ τοῦ νοσήματος τάχος, οἰχήσεται. (XI.5)

かなりの頻度だと言えるであろう。しかも、これらの使い方は何もの(者/物)かの故に何かが起きるといふ原因等を言う表現に限られている(LSJ, s.v. “*διά*”, B, III 1 et 2)。さらに言えば、上の諸例ではすべてその起きる何かは明示的に示されている(θρασυνόμενος, εὐπορέων, δυνάμενος, λαβεῖν, μέμφονται, κρατηθῆ,

(7) フランス派以外の最近の対応は以下のようである。Gomperz(前掲)、Heiberg(I.L.Heiberg, *Hippocratis Opera*, C.M.G. I,1, Berlin, 1927)ともに、本稿の結論と同じ読みをとっている。

κρατηθῆ).

以上の例示は結局、Jouanna の訳がこの作品での、そしておそらくは一般的な前置詞 *διά* + 対格の用法に即しているということを確認しているにすぎない。そして序でに、それが Jouanna の立てた本文を基礎にするかぎりほぼ唯一の可能な解釈であることも付け加えておこう。なぜなら、もうひとつこの *διά* + 対格を *ἀποφεύγειν* に関連させて読む方法があり得るが、しかし「病いに擱まる人がある故に、病いから(めぐりあわせで)逃れる」を認めれば、悪夢の世界に我々は存在していることになるだろうから、である<sup>(8)</sup>。

この例示によって、本稿筆者が何をいぶかしんでいたかが明らかに出来るように思われる。恐らく我々が問題にしている *διά* と最も近い使い方がされているのは上にあげた最初の例 (*θρασυνόμενος μὲν διὰ τούτους οὖς ψέγει*) ではないだろうか。

類似の第 1 点は、何かをつうじて何か起きるとどちらも言っているが、その何かと何かの関係がやや屈折していて、にもかかわらず、第 2 点としては、その関係が直接には表現されていないということである。

屈折しているということの意味は、すぐ次にあげられた例 (*εὐπορέων δὲ διὰ τὴν τέχνην*) と比べてみれば分る。「技術のせいで算段に満ちている」と言われる時、*τέχνη* と *εὐπορέων* の関係は極めて直接的なものである。*νικήσαι διὰ .. Ἀθήνην* (*Od.8.520*-LSJ, s.v. *διά* B-III-1 で引用されている最初の例文) というように、対格のひとつ(ここでは神)が喚起するイメージと生じることの関係は直線的である。*θρασυνόμενος διὰ τούτους* (I.3) では、結局文脈から *τούτους* はそのものたちの「無能・無知」を含意していることが分る。しかし、我々の例 (IV-1) ではもっと分りにくい。一般に、古代でもそうであろうし、現在でもそうであるが、病いに擱まる(結局治癒しないで死ぬ、等々)者が居るからといって医術や医師を悪くは言わない。治療に際して明らかな過誤や失態を医師が演じない限り。

その *οἱ τὰ χεῖρω λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων* の具体的な意味は文脈によって、就中、続く *τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχη ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην* の句によって明らかになる。つまり、病いに擱まってしま

(8) なお、Littré は、*νοσημάτων* の後ろにカンマを置いている。そうすれば、このやや構文が理解しにくい文を校訂者の理解するところから従って読むことが容易である。本稿が主張するように *νοσημάτων* の後ろの M による *καὶ* を読まないのであれば、せめてこのカンマは必要であろう。

うひとは「めぐり合わせ」によってそうになってしまうのであって、技術がそこに介在しなかったことは明らかなのだ。つまり、医術という技術が存在するということが極めて疑わしい、ということが τὰ χείρῳ λέγοντες には意味されているということになる。

そのように理解することは、ここで詳しく議論しはしないが、この文脈全体に合致する。簡単に言えば、我々が議論している文 (IV-1) の直前の文 (ὅτι δὲ οὐ πάντες, ἐν τούτῳ ἤδη ψέγεται ἢ τέχνη) の内容を、この文は敷衍・説明していることになる。

このような道筋で考えてくれば、νοσημάτων のうしろに M が伝えている καὶ が過誤による書き加えである可能性は極めて小さいと私には思える。以下、その語を含んだ本文と訳を提示して説明にかえたい。

καὶ φασιν οἱ τὰ χείρῳ λέγοντες διὰ τοὺς ἀλισκομένους ὑπὸ τῶν νοσημάτων καὶ τοὺς ἀποφεύγοντας αὐτὰ τύχῃ ἀποφεύγειν καὶ οὐ διὰ τὴν τέχνην.

「そして医術を、病いに擱まるひとびと(の存在すること)を根拠に、より悪く言うひとびとは、それ(病い)を逃れるひとびとの場合も、めぐりあわせでそうしているのであって、(医という)技術をつうじてそうしているのではない、と主張するのである」

つまり、読む側から言うところのことになる。διὰ の使用法を検討することで一部明らかにしたように、ここでの著者の文は、かなり省略を含んだ、別の意味では屈折したものになっている。かろうじて νοσημάτων のうしろに M が伝えている καὶ があるために著者の意図した、διὰ の使用法を含むこの文の意味は曖昧にならずにすんでいると思えるのだ。そのような καὶ が不注意による付加だと考えることは難しい、と判断すべきではないのか。

現在、ヒポクラテス本文研究をリードしている Jouanna は、他のことはいざ知らず、A を M にくらべて過度に高く評価するという一点に関しては原理的な過誤におちいつているのではないかと筆者は危惧している。上の短い論は、そのことの小さな例示である。祖本を、そこから出る 2 本の線の上にある A と M を証人として再構築する場合、原理的には、A と M はどこまでも同等の証言価値をもつものとしていったん認めなければならない。どちらが真実を多く伝えているかは、すべての証言を総和して言いうる小さな結果にしかすぎないし、

まだ、我々はその総和について議論する位置にない<sup>(9)</sup>。

(北海道大学)

---

(9) 本稿が最初に査読者に渡された時点では、Mの伝える  $\kappa\alpha\iota$  を読んだ上で、本稿が問題にした  $\delta\iota\acute{\alpha}$  と、さらに  $\nu\omicron\sigma\eta\mu\acute{\alpha}\tau\omega\nu$  の後ろの  $\tau\omicron\upsilon\varsigma$  も削除する校訂案が示されていた。この案はギリシア語としては立派に読めると今でも確信しているが、なにぶん手術の範囲が広すぎて、最初から躊躇とともにあった校訂案でもあった。本稿は筆者にとっては書き手の  $\delta\iota\acute{\alpha}$  のいくらか特異な用法を検討して、このノートが示した、より躊躇の小さい校訂案を納得する、という意味を持っている。たいして重要な意味を持っていそうもない些末な議論をしたかに見えるが、少なくとも、この作品の新しい校訂を目論む者にとってははけて無意味な議論だったとは思っていない。査読者と、さらに最初の校訂案に対して「手術が大きすぎる」と言って批判してくれたひとりの古典学者に対する感謝をここに記しておきたい。